

英語実力テストについて

－ 経年的な結果の考察 －

小澤志朗*1・中村護光*1・奥村信彦*1・富永和元*2・高桑潤*2

Proficiency Test of English at Nagano Kosen - Longitudinal study of results of the annual tests -

OZAWA Shiro, NAKAMURA Morimitsu, OKUMURA Nobuhiko, TOMINAGA Wagen
and TAKAKUWA Jun

Proficiency tests have been carried out for three consecutive years at Nagano Kosen. All students except freshmen receive the same examination, though some of the questions are replaced with new ones each year.

The results were favorable this year since they indicate that the students achieve higher scores as they progress through the school. This paper is a brief survey and analysis of results of the tests, as well as a consideration of their meaning.

キーワード：Proficiency Test, 経年的調査

1. はじめに

平成 17 年度から長野高専全体で実力テストが実施されている。本 (19) 年度で 3 年目が過ぎた。初年度は年間 3 回で、2 年目以降は 4 月の入学式の午後と夏休み明けの 9 月に 2 回実施されている。

英語では 4 月のテストは 2 年生から 5 年生まで同一問題で実施している。3 回ともすべて同じ形式で、同程度の問題を課している。

この 4 月のテストの過去 3 回の結果をまとめ、分析することによって学生の成績およびその傾向について分析し、考察を加え、今後の指導の参考としたい。

2. テストの内容について

実力テストの内容と実施方法について述べる。

2-1 テストの内容および形式

○問題数：100 問。多肢選択式。

○2 年生から 5 年生まで同一問題とした。基礎的な内容の問題を中心とした。

○2 年目には、6 問をより妥当と思われる同レベルの問題に差し替えた。また、実施時間が 1 年目は 45 分であったが 2 年目、3 年目は 60 分に変えた。3 年目は問題形式を変えずにほぼ同等なレベルの問題にするという方針で 1/3 を差し替えた。

表 1. 問題の種類と問題数

問題の種類	問題数
発音問題	23 問
熟語・慣用句問題	30 問
文法問題	20 問
作文問題	22 問
書きかえ問題	5 問

*1 一般科教授

*2 一般科准教授

2-2 実施方法

○解答方法はマークシート方式で、マークリーダーにより採点した。

○学生には個人の総合得点、領域別得点、学科と学年平均点を記載した結果カードによりフィードバックした。

3. 3回のテストの結果

3-1 全体の結果

合計点の結果は右表2および3の通りであった。

全体の平均点の年次上昇が見られる。平成17年度と平成18年度の差は、おそらく試験時間の変更が影響したと思われる。標準偏差も2年目と3年目は似た値である。

さらに、学年別の各年度の平均点は次の3-2に示す。ただし、ここでは平成17年度の2年生が平成18年度では3年生に、さらに平成19年度は4年生になっていることに留意する必要がある。

3-2 学年別の平均点

図1のグラフとデータから、各年度のそれぞれの学年の平均点の比較ができる。平成17年度では一番成績が良かったのは3年生で、学年が進むにしたがって平均点が下がっている。平成18年度は4年生が一番成績が良い。さらに平成19年度は5年生を頂点とした右肩上がりの推移を示している。本校が主管となって平成13・14年度に関東信越地区で行なった国専協の教育方法改善共同プロジェクトでも同様な調査を関東信越地区の高専学生を対象として実施しており、その中の英語運用力の3部門(リスニング、リーディング、ライティング)の学年推移は、3学年を頂点とし4・5年となるにつれて下がるという本テストの平成17年度の結果に酷似している。¹⁾

平成18年度、19年度のグラフではこの下降傾向に変化がみられる。ピークとなる点が学年に比して移動していることである。理由については今後の更なるデータが必要であるが、次の3点の影響も考慮されうる

だろう。一つは平成16年度の大規模なカリキュラム改訂により、新たに2単位の英語Ⅴが必修科目となったこと。また平成17年度より後援会の援助を受けて4年生全員に対してTOEICのIPテストの実施を始めたこと、平成16年度から技能審査による単位認定制度ができたことなどである。これに加えて、社会的な英語力、英語教育への関心の高まりからの影響も考えられる。²⁾

いずれにしても、グラフの値は学年があがるにつれて英語力の伸びが見られる望ましい姿を示している。

表2. 受験者数(人)

年度	平17	平18	平19
受験者数	792	794	794

表3. 全体の平均点(合計)の推移

年度	平17	平18	平19
平均点	48.0	52.2	54.3
標準偏差	12.1	13.2	13.7

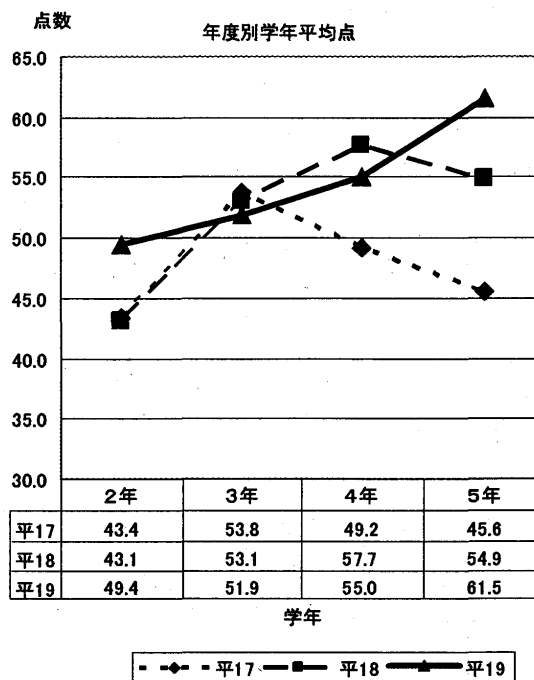


図1. 学年別の平均点(合計)の推移

平成17年度2年次の得点に対して、18年度の3年次は10点ほどの伸びを示している。同じ学生が経年的にどのような点数を得たかをあえて図2のグラフで表してみた。

4. 得点分布に見られる特徴

次に受験者の得点別の度数分布とヒストグラムを見つめる。これは、平成19年度の学生の成績がどのように分布しているか視覚的に把握するのが目的であるが、受験者全体で見るとほぼきれいな正規分布を示している。

受験者全体を図3で、学年別のヒストグラムを図5～図7に示す。

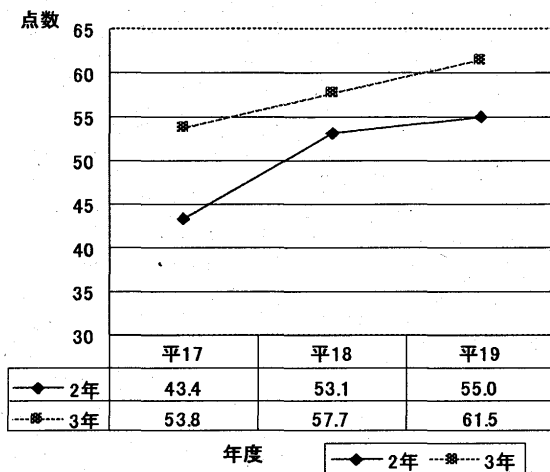


図2. 平成17年度2年生3年生の経年変化

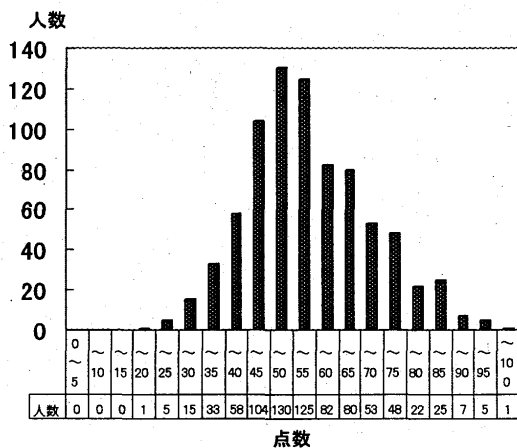


図3. 平成19年度受験者度数分布

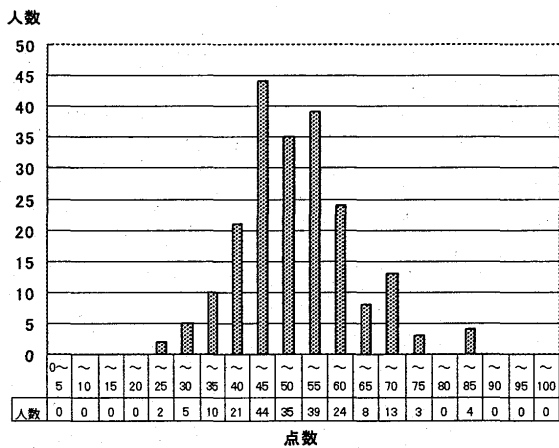


図4. 平成19年度2年度生度数分布

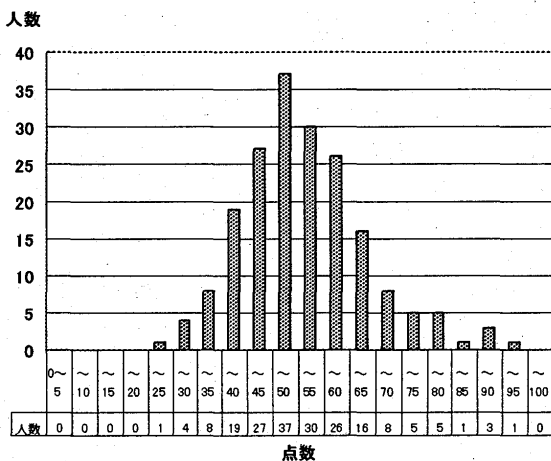


図5. 平成19年度3年度生度数分布

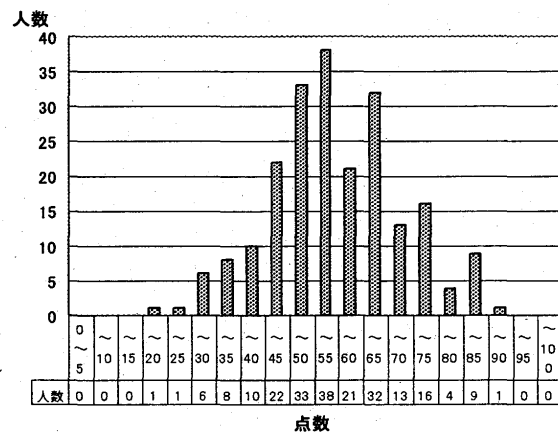


図6. 平成19年度4年度生度数分布

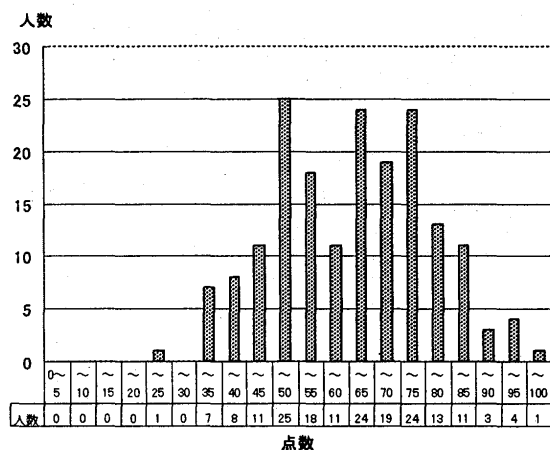


図7. 平成19年度5年生度数分布

表4. 平成19年度学年別度数分布図の傾向

観点		学年	2	3	4	5	全
特徴 (ピーク)				正		2山	正
受験者 約8割 成績	上限		70	65	75	80	70
	下限		35	35	40	45	35
	実人数		163	155	175	134	632
	%		78	81	81	74	80

*特徴欄の正はほぼ正規分布, 2山はピークが2つあることを示す。

以上の学年別のヒストグラムから, 学年別の傾向は表4のようになる。なお, ここには平均点を中心として約8割の受験者がどの点数の範囲に入るかをその下限と上限の点数で示した。約8割を目安に点数を区切ったが, 実際の人数と割合も示してある。

上記の表から各学年の傾向を見ると, 在籍者のほぼ8割を占める受験学生の得点の幅は, 3年生を除いてすべて35点の間にある。その下限は2・3年生は同じであるが4年以上は学年を追って上がっている。さらに見て行くと, 3年では上限下限の幅が30点となっており平均点付近にコンパクトにまとまっていることを示している。また4・5年と学年が上がるにつれて平均点は上がっているものの, 4年生の分布においては真ん中付近に陥没がではじめ, 5年生ではかなり顕著な2つの山が出来ている。

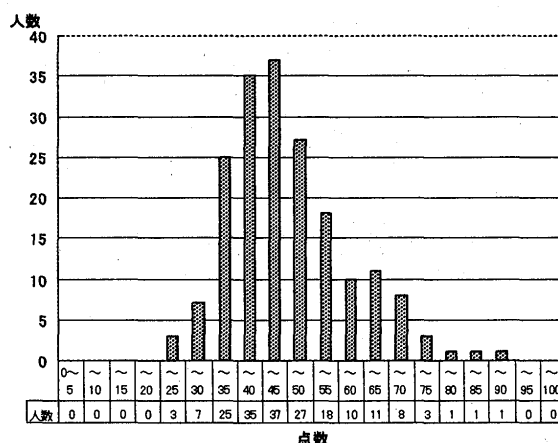


図8. 平成17年度5年生度数分布

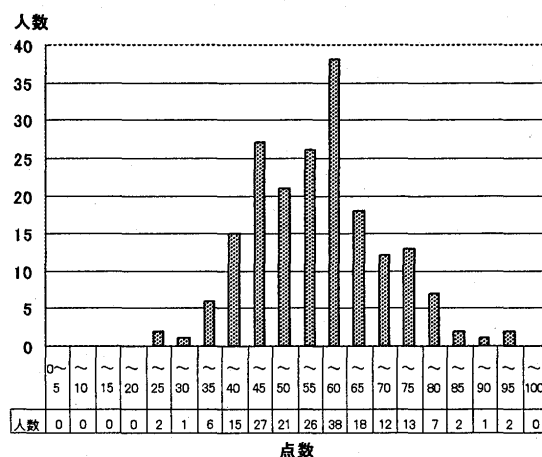


図9. 平成18年度5年生度数分布

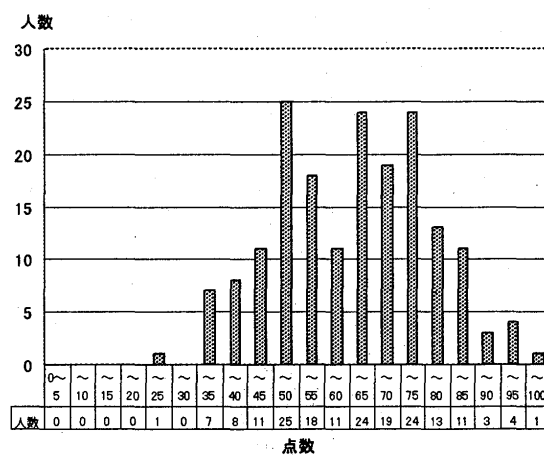


図7. (再掲)平成19年度5年生度数分布

以上は平成17年度から19年度の5年生の得点分布のヒストグラムである。

これらの図から, 2極化は平成18年度でわずかに見られはじめ, 19年度に顕著になっていることが分かる。

これは、18年度、19年度には高得点をとる学生が増えてきたことを示している。3-2「学年別の平均点」で述べている背景に加え校内の学習環境も整備され、自主的な学習を進める雰囲気が醸成されたことにより、この環境を積極的に利用する学生とそうでない学生のグループ化が進行していると考えられる。

5. 分野別の成績の特徴

次に分野別の得点の傾向を見る。2-1の問題の内容と形式で述べたように、100問を分野別に示すと発音問題、熟語・慣用句問題、文法問題、作文問題、書き換え問題があったが、問題数が均一ではないことからそれをパーセンテージに直した成就率で比較した。

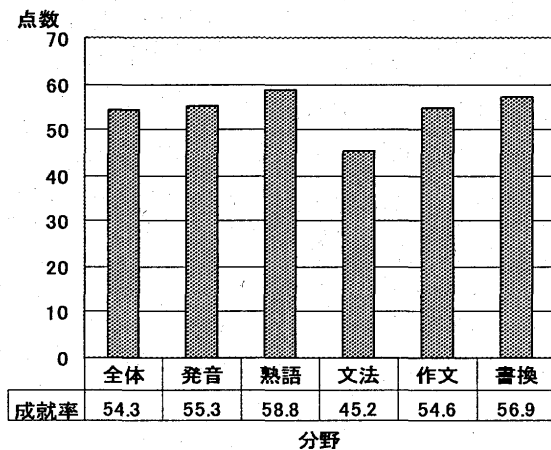


図10. 全受験者分野別成就率

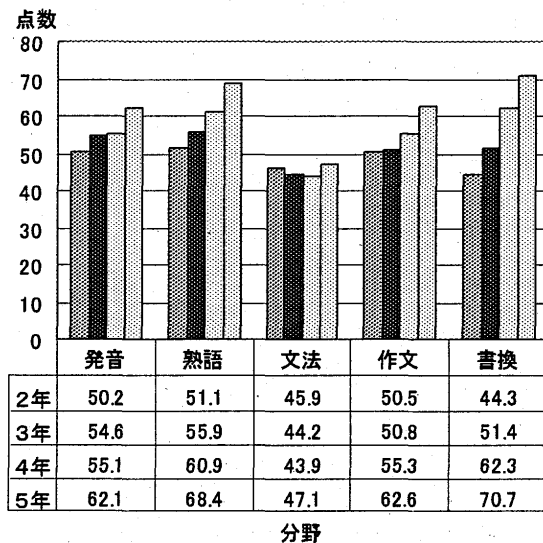


図11. 分野別学年別成就率

図10を見ると、全体の平均点が54.3であり、熟語(30点満点)の成就率が平均よりかなり良いのに対し文法(20点満点)の成就率は45.2と低い。他の3分野の得点は全体の成就率に近い。

図11では分野別学年別の成就率を示している。この図ではそれぞれの分野の学年別の成就率のグラフの棒が左から右へ2~5年生という順になっている。これを見ると文法領域の学年別の成就率(平均点)の傾向が他と違うことが分かる。文法領域は2年生から3・4年生と下がり、5年生になってやっと2年生より高い数値を示している。しかし、その差はごくわずかであり、全体としては文法領域は学生には苦手な領域であることが分かる。こうした傾向は文法領域に見られるだけで、他の領域は学年が上がるにつれて少しずつ成就率が上がっている。

6. 実力試験の位置づけ

この実力試験は、現在年2回「実力テスト」と称して行なわれているうちの1回のものである。もう1回は3年生にACE(英語運用能力テスト)と、4年生にTOEICのIPという統一テストを実施している。他の学年は長期休業の学習内容に関する確認・整理テストである。

これらのテストについてその性質から A. Hughes は以下のように熟達度テストと到達度テストの2種類に分類している。彼によれば、熟達度テストは「受験者がそれまで受けてきたトレーニングにかかわらず、受験者のその時点での言語能力を測定するため」のものであり、到達度テストとは「個々の生徒が、またはクラス全体が、あるいは授業自体がどの程度その目的を達成できたかを見極めること」がテストの目的である。³⁾したがって、ここで扱っている本校各年度の第1回英語実力テストは上記の基準では、どちらかと言えば熟達度テストに分類できる。本校で行なっている英語関係のテストを表に分類すると次ページの表5のようになる。

英語という教科の性質上、熟達度と到達度を調べるテストの両方が必要であることは明らかで、そのためには各種の外部試験があり、またそれぞれの教育機関では定期テストなどが実施されている。学習者は時には資格試験等で自分の力試し（再確認）をし、また時には自分の不足している力を蓄えてその力の伸びをその都度知る必要がある。

7. おわりに：今後の方向付けについて

3 年目にして高学年に行くにしたがって平均点がわずかでも伸びて行くという結果が現れてきた。これは、高得点側の学生が増えているためであるが、この一方で成績下位者をどのように学習の動機付けをし、サポートしていくかの課題がある。いずれにせよこの結果は、平成 16 年度から始まった 5 年生での英語の必修化というカリキュラムの改訂の評価や並行して行なわれてきている外部試験受験の奨励などの本校の英語教育への取り組みに対する反省・検討の材料となる。今後も経年的調査を継続し、推移を見守り指導の改善を図っていきたい。

表 5. テストの種別

熟達度テスト	到達度テスト
ACE	(校内) 定期テスト
TOEIC IP	確認・整理テスト
第 1 回実力テスト	2 年生第 2 回実力テスト

参考文献

- 1) 鈴木宏他：「コミュニケーション能力育成を主眼とした高専教育のあり方 中間報告書」, p.29 国立高等専門学校協会 (2002.3)
- 2) 2000(平成 12)年 1 月当時の小淵恵三首相の私的諮問機関「21 世紀日本の構想」懇談会報告書。右記 URL のウェブサイト：読売年鑑 2002 の「読売年鑑 2002 が読む近未来」より
http://www.yomiuri.co.jp/nenkan/2002_01b.htm
- 3) A. Hughes 著, 静哲人訳：「英語のテストはこう作る」, pp.11-13, 研究社 (2003.8)